D21

コミュニカティブ・サーベイ手法による参加型災害リスクコミュニケーション

Investigating risk communication with “the communicative survey method”
-Using Disaster prevention Game “Crossroad” -

○ 竹内裕希子・徐偉・矢守克也・梶谷義雄・岡田憲夫
○Yukiko TAKEUCHI，Wei XU, Katsuya YAMORI, Yoshio KAJITANI, Norio OKADA

In this paper, we address the need for a new type of social survey characterized by a two-way communication approach between investigators and respondents. We propose to name this approach as “Communicative Survey”. Communicative Survey is using PDCA (CAPD) cycle. In 2006, we had conducted questionnaire survey in the Nagata elementary school community. Based on the questionnaire survey, we identified necessary issues to discus about shelter planning and vulnerable/prioritized people during emergency time. For the detail discussion, we made some “Cross Road” version of the Nagata elementary school. We shared that “Cross Road” with the residents at the workshop. As a result, participants could discuss about evacuation and shelter planning in details.

1. はじめに

自然災害の防止は、ハード対策とソフト対策が併用されて成り立つ。中でもソフト対策を充実させるためには、住民・地域・行政の間において、平常時に防災に関する情報の共有と理解、信頼関係の構築、さらに防災における役割分担が行われるなどのリスクマネジメントが重要である。このリスクマネジメントを支える方法の一つとして、リスクコミュニケーションの手法がある。本研究では、地域住民と交流を重ねつつ地域調査を実施し、その過程において信頼性を確立するリスクコミュニケーションの新たな形態を「コミュニカティブ・サーベイ手法」と提案し、その手法を確立することを目的としている。

本報告では、兵庫県神戸市長田区長田小学校区において、2006 年 7 月に実施した避難所計画と避難行動をテーマとしたアンケート結果をもとに、矢守が開発している防災ゲーム「クロスロード」の長田小学校区編を作成し、それを用いたワークショップに関して行う。

2. クロスロードの開発とワークショップ

2006 年に長田小学校区で実施したアンケート調査結果から、災害時における要援護者の支援の問題と誰がどこの避難所へ行くかという配分の問題を抽出するに至った。この問題を地域で共有・解決することを目的として、矢守が開発する防災ゲーム「クロスロード」の長田小学校区編を作成し、それを用いたワークショップを実施した。

ワークショップは 2007 年 4 月 1 日に長田小学校にて開催し 29 名(男性 15 名･女性 14 名)が参加した。平均年齢は 63.8 歳であった。ワークショップは、クロスロード出題後、各人が YES・NO の判断を行い、その後、ポストイットと模造紙を用いて理由を議論し、最後に各グループで出された意見を発表を通じてワークショップ参加者全員と共有するという方法を取った。

図１　クロスロード出題例

3. まとめ

クロスロードを用いたワークショップを通じて、参加者は地域のどこに要援護者がいるのかを知る必要性と避難路などの安全性を確認する必要性を共有するに至った。その後、地域ではタウンウオッチングを開催するなど具体的に住民が活動を展開しつつある。今後は、これらの結果を具体的な問題を話し合うためのツール開発と避難シミュレーション、避難所計画の開発へ反映し、その結果をさらに地域へフィードバックさせる予定である。